HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学総合博物館ニュース
Author(s)	天野, 哲也; 星野, 祐子
Citation	北海道大学総合博物館ニュース, 19
Issue Date	2009-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49245
Type	book
File Information	MuseumNews_19.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ISSN 1345-059X

19 号

THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM NEWS

北海道大学総合博物館ニュース

北海道大学総合博物館は開館10周年を迎えます

まずはご挨拶から。私こと馬渡駿介は、2007年4月より2年間北海道大学総合博物館館長を務めてまいりました。本来なら2009年4月に次期館長へバトンタッチするはずでしたが、諸般の事情により、2010年3月まで館長を続けさせていただくことになりました、あと1年という短い期間ですが、なんとか大役を全うしたいと考えております。皆様のご協力をどうぞよろしく御願い申し上げます。

さて、北海道大学総合博物館は平成11年に創設され、本年で開館10周年を迎えます。入館者は開館8年目の平成19年3月に30万人を越えました。その後も入館者数は順調に増え、4月1日現在で454,168人を数えますので、おそらく本年度中に開館以来50万人を突破します。というわけで、本年度は「10周年 ＋ 50万人」と、おめでたいことが二つ続く特別な年です。50万人目の入館者には記念品を差し上げ、大々的にお祝いをしたいと考えております。10周年記念の催しもいくつか計画されています。まずは、8,9月に「生物多様な部屋ー北大の分類学の系譜」と題する特別展を開催いたします。詳細は本ニュースの4ページを御覧ください。

開館以来10年経ちますが、総合博物館はまだまだ幾多の問題を抱えています。第一の問題はスペースが狭いことです。開館当時は文部省から9000平方メートルのスペースを提示されましたが、現在専有面積は約7000平方メートルにとどまっています。特に、資料保存庫のスペースは限界に近づき、新しく寄贈された資料をどこに保管するか頭を悩ませるこの頃です。狭隘は大学全体の問題でもありますので解決はなかなか困難ですが、解消に向けて少しずつでも努力を続けなければなりません。第二の問題はスタッフの少なさです。現在、館長以外に教員は9名（教授3、准教授2、助教4）おりますが、各教員は個人の研究を進めることと学部・大学院教育の他に、貴重な資料の保存と整理、常設および企画展示、さらには一般向けの講演会や講座の開催等々、多くの仕事を抱えています。教員の補充、さらには研究補助員や展示補助員の新規雇用を大学側に要請してゆくつもりです。

貴重な学術資料を次世代へ伝えるという未来へ向けた最重要任務に加えて、北大総合博物館はインターフェイスとしての役割をリアルタイムで果たしてきました。たとえば、博物館展示を協力して作り上げることで、異分野の研究者同士、研究者と学生・院生、あるいは学生・院生同士は互いに理解を深めました。一般の方々は展示や講演会や講座を見聞きすることで北大の理解を深めたことと思います。このような、異なったものを仲介する役割は、大学では大学博物館でしか果たせません。インターフェイスとして、これからも総合博物館は北大の中で唯一無二の役割を果たして行きます。

今年度の終わり（2010年3月）には、「北海道大学総合博物館祭」を行う予定です。これは、総合博物館の1年間の全活動を報告し、関連の皆様に感謝申し上げるお祭りです。内容は、スタッフが主体となった標本整理、展示、教育などの諸活動、資料部研究員の研究、そして、ボランティアの皆様の活動等々を報告し、関連学生・院生の研究ポスター発表を行い、最後に一般の方々を含めたパーティを開催する、というものです。このお祭りは毎年度末の行事として定着させたいと考えています。皆様どうぞご期待ください。

馬渡駿介

（館長／動物分類学）

目　次

ページ1：●北海道大学総合博物館は開館10周年を迎えます
ページ2：●第61～64回企画展示
ページ4：●記念展示「生物多様な部屋ー北大の分類学の系譜」
●「医学研究科古書展示」
ページ5：●常設展3階の化石展示室のリニューアル
●資料・展示の価値を引き出すこと
ページ6：●北大教育GP「博物館を舞台とした体験型全人教育の推進」の活動
ページ7：●特任教員紹介　●寄稿「函館の思い出」
ページ9：●特任教員紹介　●異動のご挨拶
●パラタクソノミスト養成講座
ページ10：●資料部研究員活動報告会
●2008年度第2回ボランティア講座&交流会
ページ11：●黒曜岩子供セミナー
●博物館での授業をきっかけに大学院生が著書を出版
ページ12：●チェンバロの演奏会
●北大交響楽団チェンバロプロジェクト演奏会vol.3
ページ13：●セミナー
●シンポジウム　●パラタクソノミスト養成講座
ページ14：●主な出来事
●入館者数　●お知らせ　●お礼

May 2009
ISSUE 19

北海道大学総合博物館　　2009年5月発行

第61回企画展示
南極写真展『剥き出しの地球－南極大陸』
第49次南極地域観測隊セール･ロンダーネ山地調査隊の記録



標記企画展示が2008年10月28日(火)～11月12日(水)に総合博物館1階「知の統合」コーナーで開催されました。主催は南極写真展「剥き出しの地球－南極大陸」実行委員会、共催は「南極OB会北海道支部」･「阿部幹雄さんと南極を語る会」･「北海道大学総合博物館」です。

本学は、1956年の第1次隊以来半世紀が経過している我が国の南極地域観測事業に計画段階から参画しており、本学関係者は毎年地質学や雪氷学などの学術分野あるいは設営分野に参加し、我が国の南極地域観測事業を支えています。しかし、北大あるいは札幌では南極の自然を紹介する写真展などの企画はこれまで行われていませんでした。

本展では、2007年11月～2008年2月に第49次南極地域観測隊セール･ロンダーネ山地調査隊にフィールドアシスタントとして参加した本学出身の映像ジャーナリスト阿部幹雄氏による51点の全紙サイズ(46×56cm)の写真記録のほか、当総合博物館所蔵も含めた南極大陸の岩石試料、関連地質図、今回のセール･ロンダーネ山地調査隊により新たに開発されたフリーズドライ食品、重い岩石試料を運ぶために改造されたナンセンソリの実物などが展示されました。

51点の写真は、7名からなる調査隊がテントも吹き飛ばされるほどの強風と極寒の厳しい自然条件のもとで2ヵ月半にわたって行った野外調査の様子、地球の歴史を語る地質現象や激しく褶曲し地球は芸術家と思えるほどの美しい文様を示す岩石露頭などを示しました。氷と岩だけの世界が作る“剥き出しの地球”と極地の厳しい環境においてその自然を探る研究者たちの姿は、来館者に大きな感動を与えました。


講演会の様子

関連講演会が11月9日(日)午後1時～4時30分に総合博物館1階「知の交流」コーナーで開催され、70名を越える来場者がありました。

「剥き出しの地球-南極大陸」
(阿部幹雄:第49次,50次南極観測隊隊員)
「南極観測隊の食事と楽しみ」
(篠原洋一:第33次,50次南極観測隊隊員)

講演会では本調査隊用に新たに開発された各種のフリーズドライ食品の試食もあり、参加者の興味を引きました。展示･講演会ともにテレビ取材がありました。

本展示を通じて、市民の皆さんに南極の自然を知っていただくとともに、南極観測の意義を理解していただくという目的は達せられたと思われます。

在田一則
(資料部研究員／地質学)

第62回企画展示
歴史的建造物の動的保存と環境的アプローチ

平成20年11月14日(金)～11月30日(日)の間に総合博物館1階「知の統合」コーナーにおいて、北大歴史的建造物再生研究会･ピーエス株式会社主催と総合博物館共催による「歴史的建造物の動的保存と環境的アプローチ」と題した企画展示が行われました。

本展示では、ヨーロッパなどで進められている歴史的建造物の動的保存に見られるように、最近の建築スタイルが従来型のスクラップ&ビルド方式から転換し、環境負荷の軽減に配慮した様式に移行しつつあることを主にパネル展示を通して紹介すると共に、近代社会における積極的な歴史的建造物の動的保存の意義や実例を展示しました。また、北大キャンパス内外には北大が所有する多数の関連歴史的建造物が実在し、それらの現状保存と今後の活用が課題となっている事実も紹介しました。これら歴史的建造物の外部の趣はそのままに、内部の機能･快適性･経済性を重視した改修や発展的･継続的活用の手法を探る展示としました。展示は主にパネル展示を中心としましたが、このほかに具体的な紹介ビデオ映像、新旧レンガ標本、北大の歴史的建造物類(厚岸臨海実験所建物模型、北大所有の山小屋模型と説明パネル)などを加えて構成されています。

オープニング･セレモニーでは、逸見勝亮理事を始め、主催者の北大歴史的建造物再生研究会(工学研究院角 幸博、絵内正道両教授)やピーエス(株)関係者などが同席され、引き続き内覧会も行われました。翌15日の閉館後には公開シンポジウムが「知の交流」コーナーで開催され、一般市民約40名も加えて合計70余名に上る参加者の下で、建築の環境負荷に注目が集まる中での機能と快適性･経済性を両立する発展的･継続的活用の手法について、活発な議論が展開されました。

展示期間中には特に学外からの建築関

係者の見学が絶えず、展示場での関係者によるフロアトークや学生が展示場に集まって展示パネルを前にしての現場セミナーが開かれ、まさしく博物館が目指す展示物を利活用した教育が実践され、極めて意義深い企画展示となりました。
なお、僅か2週間余りの短い期間の本企画展示でしたが、期間中の入館者数は2,044名に達しました。



◀企画展示ポスター


展示風景

松枝大治
（研究部教授／鉱物学·鉱床学）

第63回企画展示
テエタシンリッ テクルコチ
先人の手あと
北大所蔵アイヌ資料　ー受けつぐ技ー

これは総合博物館の冬季企画展として、北道大学アイヌ·先住民研究センターとの共催で、この2月1日から3月29日までの期間開催したものです（第63回）。この展示ではアイヌの工芸家たちが企画の準備段階から参加し、北海道大学（北方生物圏フィールド科学センター植物園）の所蔵するアイヌ民族の物質文化資料と、今回アイヌの工芸家が制作した複製作品を併置し、あわせてその制作過程を映像で紹介しました。

オープニング·セレモニー（2/1）

展示の成功を祈って、アイヌ民族の伝統儀式カムイノミが「知の交流」コーナーで挙行されました。当館でのアイヌ民族との共同企画展もカムイノミも初めてのことです。この儀式にはアイヌ工芸家に加えて北大関係者も列席し、アイヌ文化を体験することができました。

ワークショップ（2/28、3/20）

「シカ笛作り」·「シラカバ樹皮容器作り」体験では、アイヌ民族の暮らしから生み出された技術を楽しみながら学びました。また、工芸家でハンターでもある浦川太八氏によるシカ猟のお話は、アイヌ文化と自然との深いつながり、現代における人間と自然との関係について考えさせられる内容でした。

晴れ着の試着体験と作者による解説では、展示解説を通じて、双方向のコミュニケーションが生まれ、アイヌ文化への理解と親しみがより深まりました。参加者からは、このような交流の場の設置を望む声が多く寄せられました。

関連講演会

加藤　克
「北大植物園のアイヌ民族資料
ーその歴史と特徴ー」（3/14）
小谷凱宣（名古屋大学名誉教授）
「博物館のアイヌ民族資料調査を
振り返ってーハドソン川から
エルベ川までー」（3/20）

アイヌ民族との協同による今回の企画展示は、展示観覧者だけでなく、大学関係者にも日本列島における文化の多様性を実感する貴重な機会を提供し、また、そこで博物館が果たす役割の大きさを広く示すものになりました。期間中の入館者数は7,185人でした。

天野哲也
（研究部長·教授／考古学）
山崎幸治
（アイヌ·先住民研究センター助教／民族学）
加藤　克
（北方生物圏フィールド科学センター·
植物園博物館助教／博物館史学）







第64回企画展示　「地質の日」記念展示
支笏火山と私たちのくらし

約4万年前の支笏火山噴火は我が国で最大級の巨大火山爆発であり、支笏湖はそのカルデラです。その火山灰は遠く知床半島まで到達し、厚い火砕流堆積物は支笏カルデラ周辺から札幌市・恵庭市・千歳市・苫小牧市を含む低地を埋め立てました。広大な火砕流台地は、その後の恵庭岳や樽前山の後カルデラ火山活動による軽石や火山灰とともに独自の自然景観を作っています。いっぽう、支笏火山は温泉や金属鉱床などの恵みももたらしました。明治時代以降の札幌の重要な建材である「札幌軟石」（溶結凝灰岩）もその一つです。この展示では、支笏カルデラ噴火と後カルデラ火山活動の様子、火砕流堆積物の分布と特徴、札幌市の建築遺産といえる札幌軟石の建物を紹介します。また、5月16日（土）には土曜市民セミナー「支笏火山と支笏湖よもやまばなし」（若松幹男氏：北海道地質調査業協会，瀬戸静恵氏：財団法人自然公園財団支笏湖支部）を予定しています。

● 会場 ●

総合博物館1階「知の統合」コーナー

● 期間 ●

平成21年4月28日（火）
ー平成21年5月31日（日）

在田一則
（資料部研究員／地質学）

総合博物館開館10周年記念展示
「生物多様な部屋ー北大の分類学の系譜」

総合博物館のバックヤードに現在所蔵されている多様な生物標本を、北大の分類学研究者の研究史と関連づけて3階の企画展示室に本年8月1日（土）から9月27日（日）まで展示します。この10周年企画展示の主役は生物標本です。理学研究院から無脊椎動物と藻類、恐竜や珊瑚の化石および微化石、農学研究院から哺乳類や昆虫類と陸上植物や菌類、水産科学研究院からは魚類などの多様な標本を、乾燥、液浸、腊葉、プレパラート等々、様々な保存形態のまま、ところ狭しと並べ、それらの生物群を研究した研究者を文章パネルと写真で紹介します。こうすることで、北大の分類学研究の伝統と実績を知ることが出来ますし、博物館の第一目的が「標本の保存と継承」であることを正しく認識できます。さらに、分類学の意義を理解し、地球上の生物多様性のすごさを垣間見ることができます。この展示と関連して、知の交流コーナーでは、現役の大学院生たちの研究発表ポスターを展示し、さらに週末には同じく大学院生たちの研究発表講演会を開催する予定です。乞うご期待。

馬渡駿介
（館長／動物分類学）

医学研究科古書展示

「医学展示」に関して総合博物館では、現在3階で「ムラージュ展示」を先行展示しているにとどまりますが、全館オープンの暁には総合的な常設展示に発展させることを予定しています。そこでは人間の誕生から成長そして死に至る過程、その間の病や傷害そしてこれらとの戦い、すなわち医学・医療・衛生、さらにその歴史を取り上げることが構想されています。

そうしたなか2008年10月に医学研究科から、図書室移動のために重複蔵書を整理する案内をリストとともに得ました。その数およそ和書12,000冊、洋書2,500冊です。そのうちの比較的古い書籍は、実用性は失われたとしても学史・研究史・科学史的な意味は大きいので、将来の「医学展示」に活用できると考え、医学研究科の寺沢浩一先生・渡辺雅彦先生と「救出」作業に当たりました。そこで立てた方針は、19世紀以前と20世紀前半の教科書、ハンドブックなどを中心に選ぶことでありました。

（例）

Ecker's und R.Wiedersheim's Anatomie des Frosches 1899

Hubert Luschka Die Anatomie des Menschlichen Beckens 1864



この作業で500点ほどを選びだし、総合博物館への管理替えを申請しました。医学研究科での再検討の結果、実際に移管・移動した数は約300点でした。その一部を2階「北大の蔵書」展示コーナーで展示しています。なかには、当時の北大教官の署名や献辞入りの本もあり興味深いものです。

展示作業では池上重康（工学研究科）、井上高聡（文書館）、加藤 克（植物園）の諸先生に、また搬入・配架作業では「図書ボランティア」のみなさんにご協力をいただきました。

天野哲也
（研究部長・教授／考古学）

常設化石展示室のリニューアル

絶滅哺乳類のアショロアが展示している、当館3階の化石展示室が、リニューアルされました。この展示室は、先カンブリア代から第四紀までの地球の歴史を展示してある部屋です。これまでも多くの化石が展示され充実していたのですが、「見やすい展示」を目標に、パネルと展示物の選定を中心に展示替えを行いました。

今回のリニューアルでは、ボランティアや学生の方々と議論していき完成させました。パネルの作製では、文字数や文章の難しさを考慮にいれ、デザインも時間をかけながら討論し製作を行いました。時代別のパネルには、文字数の少なく易しい解説、当時の大陸配置を示した古地理図、当時の主な出来事をリストし、短時間でも長時間で見ても楽しめる展示になっています。また、映像も流されており、恐竜時代の背景を知ることができます。展示物も、なるべく見やすいディスプレイを考え、また鏡を使うことで展示物の裏側も見られるようになっています。さらに、これまで展示していなかったモササウルス（海棲爬虫類）や恐竜の頭骨も追加しています。

今回のリニューアルは第一弾であり、今後はケース内の展示台やキャプションを変えていきたいと思っています。今後も皆さんから協力していただいて、少しずつ展示内容を充実していきたいと考えております。

小林快次
（研究部助教／古生物学）



リニューアル後の化石展示室

資料・展示の価値を引き出すこと
－2008年度「人間・社会・自然と科学技術」展示室リニューアル作業

展示制作プロセス演習（文学研究科・佐々木亨教授）では、2007年度から継続して北海道大学総合博物館1階の「人間・社会・自然と科学技術」展示室のリニューアルに取り組んでいます。2008年度は、2007年度に実施した調査のデータ分析結果に基づく4つの提案、①テーマスクリーンの改善、②テーマと個々の展示の関連性の強化、③人々の身近な生活との関連性の強化、④目玉展示の設定、に沿った活動を行いました。2008年度の作業においては、本学工学研究科との連携が不可欠であったため、同研究科副研究科長・但野茂教授に全面的にバックアップしていただきました。

前期は新たな展示コンテンツ導入に向けた準備作業を行いました。同研究科・田中啓司教授、近久武美教授、辻俊郎准教授、恒川昌美教授にヒアリングを実施し、それぞれの研究内容についてわかりやすくご教示いただきました。また、高校生向け工学部広報誌「KUON」編集員を務める工学研究科院生・秋山征太郎さん（修了）、工学部学生・青井標野さんともミーティングの場を設け、今後ご協力いただけるようお願いしました。この時に得た成果は、2009年度に展示化して活用する予定です。

後期は現展示のコンセプトを最大限活かした第一段階のリニューアル案として「既存展示のブラッシュアップ案」を策定しました。策定した案は総合博物館にプレゼンし、意見をいただきながら変更を重ねました。それに則って、ゾーン毎に担当者を決め、どのような展示にすれば来館者にメッセージが伝わりやすくなるか議論し、改善点を模索しました。具体的には、既存の資料の撤去・配置換えや一部パネルの修正、新規パネルの追加、新規の体験型展示の設置、テーマスクリーンの一新、展示室で放映しているビデオの時間短縮などについてです。新規に作成した資料については、展示制作関連会社や映像制作会社と話し合いを進めながら微調整を行いました。

この作業の中で私が主に担当したのは、当展示室で唯一解説資料、背景情報が全くなく、展示室に無造作に置かれていた「天塩大橋の模型」に、資料情報と展示室内における位置付けを付与する作業です。

初めの段階で明らかになっていたのは「社会基盤の象徴」として工学研究科から運び出されたものであること、実際の橋は現在も天塩町と幌延町の境に存在することの二点だけでした。そこで、明快で充実した解説を施す方法を検討し、設定した目標は、①橋が「社会基盤の象徴」として地域にいかに貢献したかを提示すること、②模型の作製経緯を明らかにすること、③橋の構造に関する基礎知識を示すことの三点でした。これらを達成するために、文献調査、資料調査、識者・関係者へのヒアリングを行いました。初めにインターネットや知人を介して情報を収集し、架橋当時を振り返るドキュメンタリー映像、市町村史や学会誌などの文献記述を通して天塩大橋についての基礎知識を身につけ、識者へのコンタクトを取りました。工学研究科構造デザイン工学研究室（旧：橋梁学研究室）の林川俊郎教授には、研究室内の資料所在を確認、ご提供いただき、橋梁工学の基礎知識をご教示いただきました。そして、研究室OBの新山惇氏をご紹介いただきました。同氏を通じて、天塩大橋工事の監督員であった金山一志氏から工事現場の写真を提供いただきました。また、同じく橋の設計及び工事監督員を務めた平岡英明氏からは、当時の論文・設計資料等をご提供いただいただけでなく、模型が作製され北大に寄贈されるまでの経緯、当時の工事現場のエピソードを聞かせていただきました。調査の結果、①天塩大橋は1950年代当時、最高水準の技術で設計・架設された橋で、北海道の産業、社会基盤整備の歴史上と

ても貴重なものであること、②模型は、北海道開発局から天塩大橋設計の理論指導をした本学工学研究科の今俊三教授に寄贈され、同研究科内に長年展示されていたことが明らかになりました。

本演習では、それらの事実を、提供いただいた資料とともに「人と人とをつなぐ技術―天塩大橋」という解説パネルにまとめました。パネル内の文章は、演習内で議論したものを平岡氏と林川教授に監修していただきました。また、模型には、平岡氏に伺った話を元に模型の作製経緯を示したキャプションを貼り付けました。これらの作業を通して、背景情報が欠落していた博物館資料に資料価値を付与し、展示するに足るものであることを明示することができました。

今回のリニューアル作業は多くの方の協力がなければ成り立ちませんでした。その分、演習に参加した学生として、大きな達成感を得ることができました。関係者の皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。

2009年度も、2008年度の成果を踏まえ、どのように展示コンテンツに昇華させるか議論を重ね、さらに良い展示室にしていきたいと思います。

遠藤真貴
（大学院文学研究科北方文化論講座
修士課程）


リニューアル前の天塩大橋展示


リニューアル後の同展示

北大教育GP『博物館を舞台とした体験型全人教育の推進』の活動
（2008年10月～2009年3月）

総合博物館の教育活動を基盤とした学生教育プロジェクト『博物館を舞台とした体験型全人教育の推進』は、平成20～22年度の予定で文部科学省の「質の高い大学教育等推進プログラム」に選定されています。

ただ平成20年度の活動は実質上12月から3月までの4ヶ月で行うこととなり、次年度以降のプロジェクト推進のための基盤作りのみに終わった感は否めません。最初に事業推進WG（高橋・天野・湯浅）を博物館内に立ち上げ、次に学内運営委員会・学外評価委員会を設け、総合博物館が事業の責任を持ちつつ北大全体の教育プロジェクトとして推進できる体制を整えてきました。


教育シンポジウム会場の様子

年があらたまった1月20日には『教育GPシンポジウム』を開きました。このシンポジウムでは北大、東大、京大、鹿児島大それぞれの大学博物館で展開されている教育プログラムが紹介され、大学博物館の持つ教育機能の大きな可能性が示されました。内容については「報告書」が出版されていますので教育GP事務局にお問い合わせ頂くか、HP（http://museum-sv.museum.hokudai.ac.jp/projects/edu-gp08/）を参照下さい。これと平行させて『教育GPセミナー』を本年1月～3月の間に3回開催し、北大や信州大で先行的に行われている教育プログラムの取組や課題などを披露してもらいました。これにより、大きな総合大学で全学的・学部横断的な教育プログラムを推進し継続することの難しさがWGのメンバーにも段々と見えてきました。

続いて2月26ー27日には出口教育にあたる社会体験型科目のひな形として『卒論ポスター発表会』を開催しました。会の運営にあたっては「北大　café　プロジェクト」や「博物館カフェ」の学生達に運営の協力を頂き、発表会とカフェのコラボとなりました。発表学生は4学部15名で、最初の試みとしてはまずまず成功だったと思います。運営面ではさらに改善の余地がありますが、今年度も同じような時期に開催したいと考えています。

この間、博物館で行われてきたパラタクソノミスト養成講座を、新たに学生のステップアップ科目として位置づけ、共催という形で支援・実施してきました（内容については別掲の養成講座の報告をご覧下さい）。これまで多くの一般市民に親しまれた養成講座ですが、今年度は学生の受講者を増やす工夫も必要となってきます。


卒論ポスター発表会会場

なお、本プログラムの根幹となる学生向け「HOKUDAIミュージアムマイスター」認定コースのリーフレットが作成され、本教育プログラム全体のフレームワークがようやく目に見えるようになってきました。何人程度の学生が「HOKUDAIミュージアムマイスター」認定コースの授業を受講し、何人程度の学生が「マイスター候補」の認定申請をしてくれるか気になるところです。学内の先生方には、お近くの学生・院生に本認定コースを是非勧めて頂きたいと思います。

高橋英樹
（研究部教授／植物体系学）

特任教員の紹介

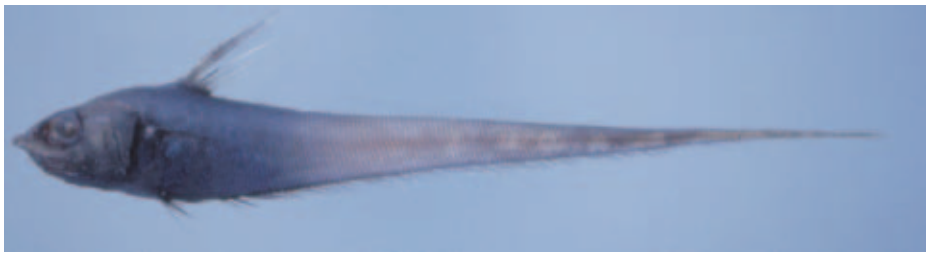
総合博物館では、2008年12月10日から2009年3月10日までの期間、特任教授としてカリフォルニア科学アカデミーからTomio Iwamoto 博士を招聘しました。Iwamoto 博士は非常に著名な研究者の一人で、分類が極めて難しいタラの仲間のソコダラ科魚類を30年以上にわたって精力的に研究し、非常に多くの業績を上げています。滞在中は「日本産ソコダラ科魚類の分類学的研究および分布に関する考察」のテーマで研究を行い、非常に多くの成果を上げられました。

2月7日には総合博物館土曜市民セミナーにおいて「日本のソコダラ科魚類」の演題でご講演いただき、終了後には多くの質問がでるなど、大変盛況のうちに終了しました。さらに、3月10日にはIwamoto 博士を中心に5名の演者を迎え、国際シンポジウム「底生性魚類の多様性」を開催し、こちらも大変好評でした。

氏名: Tomio Iwamoto
専門分野:魚類系統分類学
略歴:1939年アメリカ合衆国ロサンジェルス生まれ
カリフォルニア大学ロサンジェルス校卒業、マイアミ大学大学院でPh.D取得
現在、カリフォルニア科学アカデミー学芸員



土曜市民セミナーで講演するTomio Iwamoto博士



日本産ソコダラ類の一種、ヒゴソコダラ。Iwamoto博士はこのような魚を研究しています。

今村　央
（水産科学研究院准教授／魚類系統分類学）

寄稿

函館の思い出
(IMPRESSIONS OF HAKODATE, WINTER 2008-09)

Tomio Iwamoto, Dept. of Ichthyology, California Academy of Sciences, 55 Concourse Drive, San Francisco, CA 94118 USA

2008年12月10日から2009年3月10日までの期間、特任教授として総合博物館に勤務いただいていたTomio Iwamoto 博士からご寄稿いただきました。Iwamoto博士は3ヶ月の間、本学函館キャンパスにある大学院水産科学研究院の海洋生物学講座（魚類体系学分野）で、同キャンパスの総合博物館分館（水産科学館）が収蔵する標本を研究されており、この間の思い出を綴って下さいました。なお、かなりの長文をご寄稿下さったため、許可を得て割愛した部分があります。何卒ご了承下さい。
訳:今村　央（大学院水産科学研究院准教授／魚類系統分類学）

2008年7月、北大総合博物館の今村央准教授（訳注:当時）から、特任教授として3ヶ月間、函館で研究しないかと誘われた時、私の中を興奮と期待が駆けめぐりました。妻の意見を聞く必要はありましたが、この誘いを受け入れるのになんの躊躇もありませんでした。私は28年前に、西部アリューシャンで日本のトロール調査船による漁業資源調査に参加した時、函館を訪問したことがありました。調査の終了後に東京から帰国する前に、函館にある北大水産学部の海洋生物学講座に二日ほど立ち寄ったのです。この研究室は学生の活気に満ちあふれており、短い滞在期間にもかかわらず、いつまでも印象に残っていました。そしてそこに非常に珍しいソコダラ類の標本が保存されていることを知り、いつかここに戻ってきたいと強く感じたのです。それからずいぶん時間が経ちましたが、ついにその日がやってくることになったのです。

12月9日、久しぶりに訪れた函館は私の予想とは違っていました。飛行場からの道路には、脇にわずかな雪と氷があるだけだったのです。私は見渡す限り一面が雪に覆われていると思っていたので、このような穏やかな情景は、本や雑誌の写真や、テレビで見た札幌オリンピックなどから思い描いていた北海道のシーンとは少し違っていました。

海洋生物学講座に到着し、講座の皆さんと自己紹介しあった時は、とても親しみを感じました。おそらくそれは、ひたむきに研究する若い学生がかもし出す雰囲気からきているのでしょう。彼らは私のために標本や文献を準備してくれました。私は彼らの暖かい気持ちに心打たれ、まるで前からここにいたかのような居心地の良さを感じたのです。

函館に滞在した3ヶ月間の間、日本を中心に、世界から採集された約1600個体のソコダラ類の同定を行い、75種以上が確認できました。日本の調査船が調査を行ったとは思っていなかった海域から採集された標本を前に、いつも驚いてばかりいました。調査の結果、分布に関する多くの新知見が得られました。天皇海山から得られた標本の中には、新種と思われる12個体の標本が見つかりましたし、その他にも、初めて発見されてからほとんど報告されていなかった種の標本を見つけることもありました。このよう

な新発見は、アルコールやホルマリンがしたたり落ちる多くの標本と格闘する私に元気を与えてくれました。

日系二世のアメリカ人である私は、私の両親の故郷に長く滞在したいと思っていました。日本で研究しながら、文化、そこにすむ人々、食べ物などについて学べたことも、非常に貴重な経験でした。残念だったのは、日本語を勉強する時間がほとんどなく、また日本語の文法書と和英辞典をもってくるのを忘れたため、日本語がほとんど上達しなかったことです。私は外見上は日本人と同じなので、お店やいろいろな場所で店員さんたちに日本語で話しかけられたのですが、私が片言の日本語で話すとびっくりしていました。

40年以上の研究歴の中で、私は多くの外国を訪ねる機会がありました。その時に最も楽しみなことは、人々と会うことと、地元の食べ物を食べることです。日本はこの2点に関して、本当にすばらしいと思います。様々な海産物、食べ物の鮮度と品質、そして調理方法など、とても印象に残っています。私はあまり日本酒を飲みませんが、いくつかのすばらしい日本酒と巡り会い、日本酒の味が少し分かるようになりました。ある銘柄は非常においしく、非常に値段が高いことを除けば、また買ってみたいと思えるものでした。また、私はビールも堪能しました。私はアメリカでもよく日本のビールを飲みます。日本のビールはアメリカのものと比べると少し甘めですが、私が飲んだほとんどの銘柄は非常においしかったです。ただし、値段は少し高めです。ある時、私は古くからの友人である尼岡邦夫北大名誉教授と大沼国定公園にある蓴菜（じゅんさい）沼で氷に穴をあけてワカサギ釣りを楽しみました。そして帰宅途中にコンビニエンスストアに立ち寄り、大沼の地ビールを探しました。そしてハーフサイズのビンの3本セットの地ビールを買おうとし、尼岡先生に値段を尋ねてもらいました。店員の答えは1100円、しかも1本が。私たちは顔を見合わせ、驚きあいました。結局私は3本とも購入し、それぞれ最後の一滴まで味わいました。

海洋生物学講座は魚類の進化や系統分類学に関する質の高い出版物を数多く発表しており、魚類学の世界では非常に有名な研究室です。この研究室の学生と教員が発表した形態学的研究は、詳細で包括的であることや、系統解析や描画などに定評があります。この研究手法の源流は最も偉大な日本人魚類学者の一人である松原喜代松博士までたどることができます。彼は舞鶴にある京都大学農学部水産学科にいたのですが、私が舞鶴を訪れた時には会うことができませんでした。彼はその2年ほど前に亡くなっていたのです。先述の尼岡先生は松原博士の弟子の一人です。尼岡先生が函館に赴任され、形態に基づいた魚類の系統分類学的研究の伝統を継承したのです。尼岡先生の多くの学生の中に、現在の北大教員の仲谷一宏博士（訳注:現北大名誉教授）、矢部　衛博士、今村　央博士がいます。つまり、松原博士の系統は現在も継承され、日本の魚類学の世界の中に根付いているのです。

形態学的研究では、骨格要素や外部形態などの、非常に詳細で正確な描画が必要とされています。日本の魚類学者の描画技術は世界に通用するものです。私はいつも海洋生物学講座の皆さんの描画に感心しています。私だけでなく、私のアメリカの同僚などもそうです。なぜ日本人研究者はこのように高い描画技術を持っているのでしょうか。私は日本人は子供の頃から漢字を書く練習をしていることに一因があるのではないかと考えています。角度や曲線に注意し、丁寧に線を書くことは描画の技術に通じていると思います。ご年輩の方々が字がお上手なのも非常に興味深く感じています。ご年輩の方々はコンピュータより鉛筆やペンで字を書いたご経験が多いからではないかと思います。もしかしたら、描画の技術と字を書く技術は今後衰退していってしまうのでしょうか。

北大総合博物館の魚類コレクションは非常に大きく（20万個体以上）、標本は世界中の水域から集められているために多様性も高いです。残念なのは、収容設備と収容方法に、利便性や安全性を高める余地が多く残されていることです。標本庫は非常に古くて状態も悪く、換気・照明・排水の設備も不十分です。さらに標本棚にも安全に標本容器を収容できていない箇所があります。またホルマリンがこぼれており、長時間滞在できない場所もあります。大型のサメ・エイ類などは屋外の大型タンクに収蔵されているため、冬期間は凍結のおそれがあります。建物自体も、構造的に大規模地震による倒壊のおそれがあるかもしれません。新しい標本庫の予算が確保できることを願っています。

函館での多くのすばらしい思い出が私の中をかけ回っています。出会った方々、訪れた場所、食べ物、いろいろな経験…　もっと書きたいことはありますが、このあたりで筆を置かせていただきます。最後に一言、今回の訪問の思い出は、これまでの人生の中で最も活動的で楽しかった時期のひとつとして、いつまでも心にもこっていることと思います。そして北海道大学総合博物館と、函館のすばらしきスタッフと学生の皆さんに心から感謝申し上げます。



函館で行われたIwamoto博士のお別れ会でのひとコマ（奥の列左から4人目がIwamoto博士）

Tomio Iwamoto
（特任教授／2008年12月10日ー2009年3月10日）

特任教員の紹介

2009年3月1日より、外国人特任准教授としてアメリカ出身のグーフェン·ウィットビン氏が総合博物館に滞在中です。文化人類学が専攻ですが、滞在中は当館のコレクション、あるいは専門家の知識などをマルチメディアやインターネットを通じて発信するプロジェクトを小俣助教とともに行います。目標の一つは、常設展示と企画展示についての動画コンテンツの充実、もう一つは博物館スタッフによるデジタルメディアコンテンツ制作のサポートです。インターネットを通じて様々なアクティビティを発信することにより、世界中の人々が北大総合博物館を認識できるようになります。

6月半ばにはウィットビン氏の講演会を予定しており、プロジェクトの一部が語られる予定です。詳細は小俣友輝:
y-komata@museum.hokudai.ac.jp
までお問い合わせください。



小俣友輝
(研究部助教／博物館情報科学)

異動のご挨拶

2009年4月1日に総合博物館から大学院水産科学研究院に異動しました。総合博物館が設立された1999年に研究部の教員として採用されたため、ちょうど10年間、博物館に勤務していたことになります。その間、学内外の多くの方々のご指導·ご鞭撻を賜りました。この場を借りてお礼申し上げます。博物館では主に標本の維持·管理や展示作製などの業務に関わってきましたが、これからは学生の教育が業務の中心となります。とはいえ、教育活動においても標本は利用しますし、標本を重視する姿勢に変化はありません。微力ではありますが、資料部研究員として、これからも博物館活動に関わっていきたいと考えています。今後ともよろしくお願い申し上げます。

今村　央
(水産科学研究院准教授／魚類系統分類学)

パラタクソノミスト養成講座

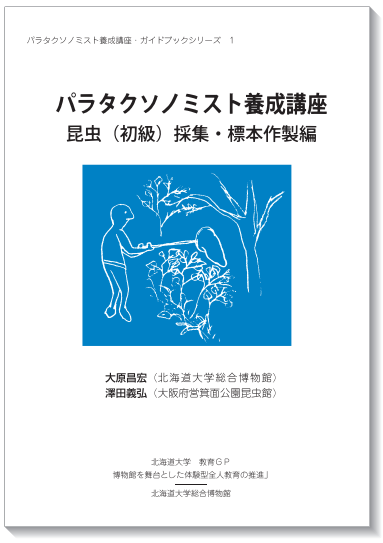
2008年度におけるパラタクソノミスト養成講座は、後期から教育GP「博物館を舞台とした体験型全人教育の推進」のプロジェクトの一部として位置づけられ、より充実した体制で運営されました。10月から3月まで、14の講座が開かれ、延べ121名(地学野外観察会を除く)が参加しました。ポスターのデザインも一新され、教育GPのもと新たなパラタクソノミスト養成講座がスタートしました。





講座(日付:参加者)
- ·きのこ(初級)　10月4日　9名
- ·岩　石(中級)　11月22–23日　12名
- ·鉱　床(中級)　12月6–7日　7名
- ·化　石(初級)　12月7日　5名
- ·鉱　物(中級)　12月13–14日　7名
- ·コ　ケ(初級)　1月10日　5名
- ·昆　虫(初級)　1月24–25日　14名
- ·鉱　物(上級)　2月7日　3名
- ·イネ科(中級)　2月8日　10名
- ·甲虫目(中級)　2月14–15日　12名
- ·水　草(初級)　2月21日　8名
- ·鉱　床(上級)　2月21–22日　6名
- ·岩石·鉱物(初級)　2月28–3月1日　18名
- ·岩石·鉱物野外観察会　10月11日　46名

昆虫分野では、ガイドブック[大原昌宏·澤田義弘(2009)『パラタクソノミスト養成講座　昆虫(初級)採集·標本作製編』]を出版し、養成講座のより充実した運営のための教材を整備しました。



ガイドブック『パラタクソノミスト養成講座
昆虫(初級)採集·標本作製編』

大原昌宏
(研究部准教授／昆虫学)
持田　誠
(研究支援推進員／標本·資料管理)

資料部研究員活動報告会

平成21年2月19日、総合博物館「知の交流コナー」にて、「2008年度　北海道大学総合博物館　資料部研究員活動報告会」が開催されました。



資料部挨拶に立つ戸田正憲資料部長

総合博物館には現在61名の資料部研究員がおり、収蔵学術資料の研究を主とし、それに係る資料管理、教育を行っております。通常の博物館業務（展示·教育·収蔵·研究）のなかでも資料をあつかう研究部門は、展示や教育普及事業と違って、来館者や博物館外部の人々の目に触れることがありません。しかし、大学博物館の根幹をなす重要な部門（役割）であることから、今回、資料部研究員による研究成果報告会を一般公開として行いました。

朝の9時から夕方の5時まで24件の発表がなされ、関係者や博物館ボランティアなど約50名が参加し、お互いの研究成果について活発な議論がなされました。

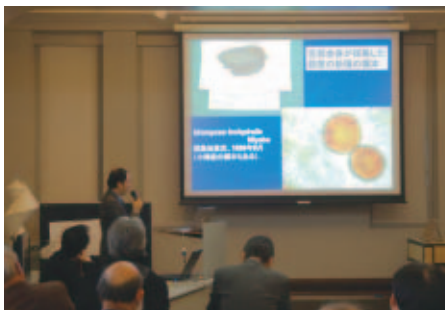
発表者、内容は以下の通りです。

01　高倉 純「石器作りの体験型学習」
02　小笠原正明「縄文時代に東日本に広く流通したアスファルトの産地同定」
03　小野裕子「総合博物館所蔵　オホーツク文化関係資料を用いた研究活動から」
04　増田隆一「オホーツク文化人骨の古代DNA研究と動物骨標本を利用した学生教育」
05　池上重康「北海道大学総合博物館旧第二農場所蔵農具コレクション＜鍬＞について」
06　高井宗宏「札幌農学校第2農場（通称モデルバーン）での活動」
07　小野修司「工学部鉱石標本移管の経緯と現状」
08　ゴータム ピタンバル「On the use of magnetic susceptibility for characterization of rocks (Himalaya) and soils (Hokkaido)」
09　小泉 格「研究活動報告」
10　在田一則「衝突造山帯（ヒマラヤ）の研究をめぐって」
11　小亀一弘「北大総合博物館収蔵の海藻類標本の維持·管理」
12　堀口健雄「原生生物の標本」
13　増田道夫「紅藻類の新種カサナリトサカ*Meristotheca imbricata* Faye et Masudaの記載」
14　大原 雅「林床植物の生活史研究を基礎とした低地林保護のための環境教育プログラムの開発」
15　小林孝人「北海道大学総合博物館菌類標本庫の標本管理」
16　仲谷一宏「メガマウス（ネズミザメ目、メガマウスザメ科）の摂食生態」
17　末永義圓「ブタ頭蓋の副鼻腔について」
18　大泰司紀之·太子夕佳「哺乳類に関する動物地理学的研究」
19　高久 元「トゲダニ類の分類や分布に関する最近の研究」
20　小林憲生「アジア産マダラテントウの分子系統/ 北大所蔵昆虫標本の整理」
21　稲荷尚記「甲虫を中心とした昆虫標本の管理業務」
22　戸田正憲「属階級群以上の分類体系を改訂する際のタイプ種の重要性:ショウジョウバエ科（Drosophilidae)の場合」
23　舘 卓司「北大博物館に収蔵されている双翅目標本の整理およびそれらを用いた研究活動」
24　伊藤誠夫「活動報告」

戸田正憲
（資料部長·低温科学研究所教授／昆虫学）
大原昌宏
（研究部准教授／昆虫学）



メガマウスの標本について報告する仲谷一宏研究員



宮部金吾の菌類標本について報告する小林孝人研究員

2008年度第2回ボランティア講座＆交流会

総合博物館では、約150名のボランティアに標本整理や展示解説、図書室業務など13分野で活動していただいています。ボランティアに登録していただく際には、ボランティア·マネジメント担当の筆者から大学博物館である当館の使命や成り立ち、活動展開、そしてボランティアの役割と位置付けについてご説明し、各分野の担当教員の指導を受けて活動に従事していただいています。2007年度より年2回、ボランティア活動の意義について確認の意味もこめたガイダンスと、博物館に関連した特定のテーマに関する講義、ボランティアの意見交換から成る「ボランティア講座&交流会」を開催しています。

2008年度第2回は2009年3月22日に開催し、小林快次助教に、リニューアルした化石の展示室をご案内いただきました。まず、小林先生からリニューアルの経緯と趣旨、今後の展望をお話いただきました。詳細は本号の関連記事をご参照下さい。その後、先生の指導学生であり、化石と展示解説のボランティアでもある田中嘉寛さん（理学院修士2年生）と石田祐也さん（理学部4年生）を交えて、展示解説していただきました。見るポイント、解説するポイントを沢

山教えていただきました。小林先生は、このリニューアルは先生とボランティア、理学部・理学院の学生、博物館実習に参加した文学研究科の院生など、様々な方とのディスカッションを経た協働作業であることにも意義があると語られました。

13グループから16名にご参加いただき、日ごろのグループの活動を紹介し合う交流会も和やかに行われました。

湯浅万紀子
（研究部准教授／博物館教育学）



リニューアルした化石展示室で

黒曜岩子供セミナー

平成20年11月15日（土）10:00～17:00の日程で、8組の親子（合計18名）の参加の下、黒曜岩子供セミナーが総合博物館（共同研究室および実習室）で開かれました。

セミナーで使用された黒曜岩試料は、平成19年8月に鳥取大学名誉教授吉谷昭信先生より本学総合博物館に寄贈されたものです。その一部はアインシュタイン・ドーム回廊に展示中ですが、長年研究されてきた日本全国を網羅した黒曜岩を始めとし世界各地から収集されたもので、それら全ての試料の化学分析結果が得られており、地質学的のみならず考古学的にも貴重な標本です。吉谷先生から標本が寄贈された時、博物館ボランティアの方々の発案で小中学生を対象にした黒曜岩子供セミナーを開催し、特に石器製作用および直接手に取って触れさせる目的で、博物館収蔵標本とは別に余剰の標本を教材用として寄贈を受けました。

寄贈後1年を経てようやく子供セミナーが実現しましたが、セミナー当日の午前中には黒曜石に関係した講義（黒曜岩と考古学：天野哲也博物館教授、黒曜岩とは？：松枝大治博物館教授、黒曜岩を用いた石器の作り方：高倉　純埋蔵文化財調査室助教）と展示中の黒曜岩標本の見学を行いました。また、午後からは黒曜岩を用いた石器製作（黒曜岩ナイフ）実習を行い、さらに完成した石器ナイフを用いて調理実習と試食を行いました。調理メニューは「石狩鍋」と「鳥の水炊き」でしたが、自作ナイフの切れ味を体験すると共に、完成した料理に舌鼓を打ちながら原始時代を偲び、セミナーに関する意見交換も行いました。この実習では、遺跡から出土した石器を用いてのクルミ割り体験もしましたが、子供達だけでなく付き添いの親も夢中になって石器製作や調理に取り組んでいる様子が印象的でした。

参加した親子全員のアンケートでは全て「大満足」の評価が得られ、是非次回もまたこのような子供セミナーを開催して欲しいとの要望が多数ありました。

末筆になりますが、今回の黒曜岩子供セミナーの発案、準備、運営等で献身的なご協力を頂きました博物館地学ボランティアの方々に、紙上を借りて深くお礼申し上げます。

松枝大治



黒曜岩石器製作の実習風景



自作の石器ナイフで調理に取り組む子供達

博物館での授業をきっかけに大学院生が著書を出版

理学院自然史科学専攻で天野哲也教授と小俣友輝助教、筆者が担当している演習「博物館コミュニケーション特論」では、受講生自身で当館の課題を見出し、それを解決するためのプロジェクトを企画・運営・評価する実践にグループで取り組んでいます。この授業がきっかけで、2009年2月、現役の大学院生（当時）の柾谷洋平さんが著書『北海道　化石としての時刻表』（亜璃西社）を出版しました。

柾谷さんは理学院科学基礎論研究室の松王政浩教授のもとで科学哲学を研究していました。博物館の演習では、彼は他の大学院生達と共に北海道の歴史を題材にしたワークショップ「ヒストリカル・カフェ」（本誌16号に紹介）を企画しました。その中で「化石としての時刻表」の発表を担い、時刻表の数字の羅列から北海道の社会史を読み取り、時刻表がモノとして残っていることの意味を解説しました。その発表を報じる新聞記事を読んだ出版社から、この題材を発展させた著書出版の申し出を受け、著書をまとめ、そして松王先生の指導のもとに修士論文も完成させました。

総合博物館では今後も、学生達が社会に向けた博物館活動を担い、新しい可能性を見出す教育を行っていきたいと考えています。



著書を手にした柾谷洋平さん

湯浅万紀子
（研究部准教授／博物館教育学）

チェンバロの演奏会
2008年12月7日(日)、2009年2月15日(日)

総合博物館では、2004年に台風に倒れたポプラから作られた「ポプラチェンバロ」による演奏会を行っています。学内外から寄せられた多くの方の暖かい気持ちとご寄付により、ポプラ制作家の横田誠三氏により制作されたポプラチェンバロは、当館1階・知の交流コーナーに展示され、チェンバロボランティアにより管理・運営されています。

「チェンバロの小さな演奏会」は、300年前のイタリアチェンバロの典型的なモデルを模したポプラチェンバロを用いて歴史や材料、古典音楽・音楽家についてのお話しと演奏を行い、来館者の方々が芸術や文化に親しんでいただけるようにと行われている企画です。



2008年12月7日(日)には「ポプラチェンバロと様々な楽器による音楽会」を開催しました。テレマン、シェドヴィユ、マルチェッロの作品が演奏され、様々な楽器とチェンバロの音色の掛け合わせや、チェンバロと共に演奏され得たルネサンス～バロック期の楽器の多様性が画像資料により紹介されました。演奏は石澤廉さん(フルート)、武田育枝さん(オーボエ)、武田朗秀さん(ヴァイオリンとヴィオラ)、清水聡子さん(チェンバロ)、ガイドは、総合博物館チェンバロボランティアの村上英樹さんでした。

2009年2月15日(日)に行われたチェンバロの演奏会では、「イタリアンチェンバロでイタリアンバロック! vol.2」と題して、声楽とチェンバロ、リコーダーとチェンバロのアンサンブルやチェンバロの独奏などが行われました。フレスコバルディやヴィヴァルディ、テレマンなどの作品が演奏され、深い雪にも関わらず40名ほどの聴衆の方々に楽しんでいただけました。当日の演奏は、声楽:久住千佳子さん、村上英樹さん、陣内麻友美さん、リコーダー:中野聖子さん、チェンバロ:新妻美紀さん、高橋友子さん、清水聡子さん、北川高之さん、陣内直さん、広重真人さんでした。これら演奏会で椅子並べや誘導にご協力いただいたボランティアの皆さまに感謝いたします。



総合博物館では、5月からは毎週木曜日の14:00から、チェンバロボランティアによる小さな演奏会を行っています。ステキな午後のひと時を、古(いにしえ)の音楽とともにお過ごしください。

小俣友輝
(研究部助教／博物館情報科学)

北大交響楽団チェンバロプロジェクト演奏会 vol.3
2009年1月23日

今回で3回目となる「北大交響楽団チェンバロプロジェクト」は、非常に寒く足場の悪い1月23日(金)に行われました。このプロジェクトは、80年来の歴史を有する北大公認学生団体「北大オーケストラ」からバロック音楽合奏のために有志が集い2007年に結成されたものです。当日は奥聡教授(北大メディア・コミュニケーション研究院)の指揮のもと、フランツ・ヨーゼフ・ハイドンの弦楽四重奏曲第17番　ヘ長調 Op.3／5「セレナーデ」Hob. III:17、ヨハン・セバスティアン・バッハのフルートとオブリガートチェンバロのためのソナタ　ト短調　BWV1020、ブランデンブルグ協奏曲第三番　ト長調　BWV1048が演奏されました。聴衆は15名ほどと大変少なくはありましたが、それゆえ贅沢な室内音楽鑑賞会となり、アンコールにはプロジェクトの十八番であるゲオルク・フリードリヒ・ヘンデルのオンブラ・マイ・フが演奏されました。



演奏は北海道大学交響楽団(メンバー:ヴァイオリン…三浦隆洋さん、坂井絵里花さん、香田亜以さん、ヴィオラ…柳芳紀さん、清水雄介さん、今野円さん、チェロ…深谷剛さん、吉田裕介さん、鈴木絵里奈さん、ヴィオローネ…藤原沙緒梨さん)、フルート…福士江里さん、チェンバロ…新妻美紀さんでした。

ホームページ更新、ポスター制作にご協力いただいた村上英樹さん、誘導などにご協力いただいた石川恵子さんほか、お手伝いいただいた皆さまに感謝いたします。

小俣友輝
(研究部助教／博物館情報科学)

平成20年10月から平成21年3月までにおこなわれたセミナー

第206回　北大総合博物館土曜市民セミナー（道民カレッジ連携講座）
「札幌農学校の教育思想 ―偽と戦争への道に抗した先覚」
山本玉樹（総合博物館 資料部研究員）
日時:10月11日（土）13:30−15:00（参加者約80名）

第207回　北大総合博物館土曜市民セミナー（道民カレッジ連携講座）
「北の出土刀を科学する−X線CT法による上古刀の鏑（はばき）構造の解析」
佐藤矩康（㈶日本美術刀剣保存協会札幌支部 名誉顧問）
日時:11月8日（土）13:30−15:00（参加者約90名）

第208回　北大総合博物館土曜市民セミナー
「日本でもマイクロファイナンスを始めてみませんか?〜市民が変える内外の貧困・格差〜」
菅　正広（大学院公共政策学連携研究部 教授）
日時:11月29日（土）13:30−15:00（参加者約70名）

第209回　北大総合博物館土曜市民セミナー（道民カレッジ連携講座）
「今日の世界におけるパキスタンの重要性」
アシム ムナワー（総合博物館 ボランティア（HUISA））
日時:12月13日（土）13:30−15:00（参加者約90名）

第210回　北大総合博物館土曜市民セミナー（道民カレッジ連携講座）
「バッハの時代の作曲家たち〜1700−1750年の音楽模様」
明楽みゆき（チェンバロ奏者）
日時:1月10日（土）13:30−15:00（参加者約100名）

第211回　北大総合博物館土曜市民セミナー北海道大学教育GPセミナー
「博物館と自然環境」
佐藤利幸（信州大学理学部 教授）
日時:1月24日（土）13:30−15:00（参加者約30名）

第212回　北大総合博物館土曜市民セミナー
「日本のソコダラ科魚類−Grenadiers of Japan」
トミオ イワモト（カリフォルニア科学アカデミー 学芸員）
日時:2月7日（土）13:30−15:00（参加者約30名）

第213回　北大総合博物館土曜市民セミナー（道民カレッジ連携講座）
「＜学問の神様＞の造形 雷／御霊／菅原道真」
鈴木幸人（大学院文学研究科 准教授）
日時:2月14日（土）13:30−15:00（参加者約90名）

第214回　北大総合博物館土曜市民セミナー北海道大学教育GPセミナー
「世界の博物館における鉱物展示から見えるもの」
豊　遙秋（元産業技術総合研究所地質標本館 館長）
日時:2月28日（土）13:30−15:00（参加者約60名）

第215回　北大総合博物館土曜市民セミナー（道民カレッジ連携講座）
「北大植物園のアイヌ民族資料−その歴史と特徴−」
加藤　克（北方生物圏フィールド科学センター植物園博物館 助教）
日時:3月14日（土）13:30−15:00（参加者約90名）

第216回　北大総合博物館土曜市民セミナー北海道大学教育GPセミナー
「北方地域人間環境科学教育プログラムの取り組みと問題点」
上田　宏（北方生物圏フィールド科学センター 教授）
日時:3月21日（土）13:30−15:00（参加者約20名）

平成20年10月から平成21年3月までにおこなわれたシンポジウム

第26回　総合博物館（公開）シンポジウム
「カレル・チャペック=シンポジウム」
日時:10月25日（土）13:00−17:00（担当:大原）
（参加者約100名）

第27回　総合博物館国際（公開）シンポジウム
「エンマムシの分類と系統」
日時:12月17日（水）13:30−15:30（担当:大原）
（参加者9名）

第28回　総合博物館（公開）シンポジウム
2008年度教育GPシンポジウム
「博物館から拓く学生教育の未来」
日時:1月20日（土）13:30−15:00（担当:高橋）（参加者約50名）

第29回　総合博物館国際（公開）シンポジウム
「西部環太平洋地域の島弧環境における熱水活動に関連する金属鉱化作用」
日時:2月20日（金）13:00−18:00（担当:松枝）
（参加者約20名）

第30回　総合博物館・水産科学研究院共催国際（公開）シンポジウム
「底生性魚類の多様性」
日時:3月5日（土）13:30−16:10（担当:今村）（参加者約30名）

平成20年10月から平成21年3月までにおこなわれたパラタクソノミスト養成講座

10月4日（土）
きのこパラタクソノミスト養成講座（初級）
小林孝人・高橋英樹（総合博物館）
定員:10名 対象:中学生以上・一般 （参加者9名）

10月11日（土）
岩石・鉱物野外観察会
松枝大治（総合博物館）・三浦裕行（大学院理学研究院）
会場:日高・富良野・三笠方面
定員:40名 対象:小学生以上・一般 （参加者46名）

11月22日（土）〜23日（日）
岩石パラタクソノミスト養成講座（中級）
在田一則（総合博物館）
定員:10名 対象:小学生以上・一般 （参加者12名）

12月6日（土）〜7日（日）
鉱床パラタクソノミスト養成講座（中級）
松枝大治（総合博物館）
定員:10名 対象:小学生以上・一般 （参加者7名）

12月7日（日）
化石パラタクソノミスト養成講座（初級）
小林快次（総合博物館）
定員:6名 対象:高校生以上・一般（参加者5名）

12月13日（土）〜14日（日）
鉱物パラタクソノミスト養成講座（中級）
三浦裕行（大学院理学研究院）
定員:10名 対象:小学生以上・一般 （参加者7名）

1月10日（土）
コケ植物パラタクソノミスト養成講座（初級）
内田暁友（斜里町立知床博物館）
定員:10名 対象:中学生以上・一般（参加者10名）

1月24日（土）〜25日（日）
昆虫パラタクソノミスト養成講座（初級）
大原昌宏（総合博物館）・澤田義弘（大阪府箕面公園昆虫館）
定員:12名 対象:高校生以上・一般（参加者14名）

2月7日（土）
鉱物パラタクソノミスト養成講座（上級）
三浦裕行（大学院理学研究院）
定員:4名 対象:鉱物（中級）修了者、高校生以上・一般（参加者3名）

2月8日（日）
イネ科植物パラタクソノミスト養成講座（中級）
木場英久（桜美林大学）
定員:10名 対象:中学生以上・一般（参加者10名）

2月14日（土）〜15日（日）
甲虫目昆虫パラタクソノミスト養成講座（中級）
大原昌宏（総合博物館）・澤田義弘（大阪府箕面公園昆虫館）
定員:12名 対象:高校生以上・一般（参加者12名）

2月21日（土）〜22日（日）
鉱床パラタクソノミスト養成講座（上級）
高橋亮平（九州大学工学研究院）・松枝大治（総合博物館）
定員:5名 対象:鉱床（中級）修了者、高校生以上・一般（参加者6名）

2月21日(土)
水草パラタクソノミスト養成講座(初級)
　山崎真実(札幌市博物館活動センター)(参加者8名)

2月28日(土)～3月1日(日)
岩石・鉱物パラタクソノミスト養成講座(初級)
　在田一則(総合博物館)・三浦裕行(大学院理学研究院)
　定員:10名 対象:小学生以上・一般 (参加者18名)

平成20年10月から平成21年3月までの主な出来事

10月　1日　富良野市生涯学習センター(45名)解説
10月 24日　企画展示「カレル・チャペック」展オープニングセレモニー
10月 25日　企画展示「カレル・チャペック」展 10／25－12／25
10月 25日　総合博物館(公開)シンポジウム
「カレル・チャペック＝シンポジウム」
10月 28日　企画展示「南極写真展」10／28－11／12
11月　7日　ソウル大学代表団(9名)解説
11月　9日　南極写真展関連講演会
11月 14日　企画展示「歴史的建造物の動的保存と環境アプローチ」展
11／14－11／30
11月 15日　黒曜岩子供セミナー
11月 27日　サハ大学ウリヤナ副学長来館・懇談
12月　7日　ポプラチェンバロと様々な楽器による音楽会
12月 10日　特任教授 Tomio Iwamoto 氏(カリフォルニア科学アカデミー)着任 12／10－3／10
12月 10日　会計検査院実地検査員(1名)解説
12月 17日　総合博物館国際(公開)シンポジウム
「エンマムシの分類と系統」
1月 20日　2008年度教育GPシンポジウム
「博物館から拓く学生教育の未来」
1月 23日　北大交響楽団チェンバロプロジェクトvol.3
1月 30日　国立大学法人10大学理学部事務長会議参加者(10名)解説
2月　1日　企画展示「テエタシンリッ テクルコチ」展
オープニングセレモニー
2月　1日　企画展示「テエタシンリッ テクルコチ」展 2／1－3／29
2月 13日　総長との懇談会
2月 19日　総合博物館資料部研究員活動報告会
2月 20日　総合博物館国際(公開)シンポジウム
「西部環太平洋地域の島孤環境における熱水活動に関連する金属鉱化作用」
2月 26日　教育GP主催 卒論ポスター発表会 2／26－27
2月 27日　文部科学省事務次官御一行(5名)解説
3月　1日　特任准教授 Guven Peter Martin Witteveen 氏着任
3／1－6／30
3月　5日　総合博物館・水産科学研究院共催国際(公開)シンポジウム
「底生性魚類の多様性」
3月　6日　文部科学省大臣官房会計課経理班主査御一行(5名)解説
3月 11日　中国上海師範大学副学長御一行(5名)
3月 19日　日本博物館協会に加入

入館者数(平成20年10月～平成21年3月)

	入館者数	見学団体数	解説の件数	企画展示(略称)
10月	6,343	31	14	カレル・チャペック展 南極写真展
11月	5,764	17	15	カレル・チャペック展 南極写真展 歴史的建造物展
12月	2,704	9	3	カレル・チャペック展
1月	1,729	3	2	
2月	3,084	8	6	テエタシンリッ テクルコチ展
3月	4,100	6	1	テエタシンリッ テクルコチ展

お知らせ

- 馬渡館長の任期が本年3月31日で満了になりましたが、引き続き再任されました。任期は平成22年3月31日です。
- 今村准教授が大学院水産科学研究院に異動されました(2009年4月1日)。
- 河合俊郎氏が総合博物館専任教員(助教)として採用されました(2009年4月1日)。所属は研究部資料基礎研究系です。
- 齋藤貴之氏(2008年11月) 舘 亜古氏(2008年12月)のお二人が教育GPのコーディネーター(事務補佐員)として採用されました。
- アイランドアークはリニューアル実施中です。
- 一等重力基準点がS棟1階階段脇に移設されます。
- 道新ぶんぶんクラブとの共催で、会員向け教養講座を実施します。詳細は道新ぶんぶんクラブのホームページをご覧ください。
- 館内、出入り口近傍での禁煙にご協力をお願いいたします。

お　礼

以下の方々に,学術標本作製・企画展示準備等で協力いただきました。謹んでお礼申し上げます(平成20年10月～平成21年3月)。

植物標本:青野恵実、奥本陽子、桂田泰恵、金上由紀、神村奏恵、北道米雄、久保田歩、黒田シヅ、甲山幸子、笹森明子、庄山紀久子、鈴木順子、須田　節、高橋美智子、徳原和子、永山和樹、永山　修、古田暁彦、星野フサ、三浦美恵子、与那覇モト子、渡辺隆司
菌類標本:笹森明子、鈴木順子、田中由香、三浦美恵子
昆虫標本:青山慎一、石垣聡子、稲荷尚記、梅田邦子、大矢朗子、岸田耕一、喜多尾利枝子、櫛引靖子、久万田敏夫、桑島優和、永山 修、古田未央、宮 敏雄、宮本昌子、閤田高宏、山本ひとみ、米田友祐
考古学系:木村麻衣子、比留間俊文
地　学:在田一則、荻田雄輔、岡田美佐子、生越昭裕、加藤典明、神村奏恵、甲山幸子、堺　俊樹、佐藤和子、嶋野月江、塚田則生、寺西辰郎、鳥本准司、野邊果愛、福地伸章、宮　敏雄、山崎敏晴、安田　正、山本ひとみ、渡辺隆司
情　報:石上隆達、大石琢也、村上英樹
化　石:相原大介、石田祐也、石橋七朗、江越 春、大塚勇太郎、岡田美佐子、尾上洋子、菊地香織、呉谷 文、清水良平、田中嘉寛、千葉謙太郎、寺西辰郎、中野 系、安田 正、八巻千晶、山田祥子、渡辺隆司
北大の歴史展示:寺西辰郎
展示解説:在田一則、石川満寿夫、石田祐也、石橋七朗、井上拓己、河本恵子、児玉 諭、齋藤美智子、田中嘉寛、寺西辰郎、中野 系、西川笙子、沼崎麻子、沼田勇美、林 昭次、村井容子
平成遠友夜学校:石田多香子、大野円実、久保拓士、齋藤美智子、竹内ひかる、田中敏夫、沼田勇美、原渕 祐、村井容子、横田麦穂
図　書:柏谷美也子、韓 賞嵩、齋藤美智子、塚田則生、西川笙子、沼田勇美、久末進一、鮒田久意、星野フサ、八木田道敏
4Dシアター:石倉未奈、井上拓己、荻田雄輔、久保拓士、呉谷 文、小松麻美、佐藤祐介、長水しのぶ、柳田拓人、若山真梨子
チェンバロアカデミー:石川惠子、大矢朗子、北川高之、久住千佳子、香田亜衣、小坂佳子、小西智子、佐藤万記子、清水聡子、高橋友子、土橋頼子、新妻美紀、村上英樹

(敬称略)

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
北海道大学総合博物館ニュース　第19号
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
北海道大学総合博物館ニュース
編集:天野哲也・星野祐子
発行日:2009年(平成21年)5月
発行者:馬渡駿介
発行所:北海道大学総合博物館
住所:060-0810 札幌市北区北10条西8丁目
電話:011-706-2658・FAX:011-706-4029
E-mail:museum-jimu@museum.hokudai.ac.jp
http://www.museum.hokudai.ac.jp/
印刷:柏楊印刷株式会社